
コットン・タイム

春野桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コットン・タイム

【Nコード】

N1532A

【作者名】

春野桜

【あらすじ】

美保と智の関係は友達以上恋人未満。甘い時間を過ごせればそれでよかったと思っていたけれど…。

「今度は木曜あたりに映画でも行こうか」

あなたが言う。

「うん、いいよ」

私は笑顔で答える。

ベッドに横たわりながら、身支度をするあなたをじっと見つめる。
…私もそろそろ着替えなくちゃ。チェックアウトまであと三十分。
よいしょ、と起き上がると気持ちの良いけだるさが私を襲った。

「美保」

あなたが私を呼んだ。

ふと見上げると、すでに服を着たあなたが私の頬に軽いキスをした。
くすぐりたい。

なんか幸せ。

「何？智^ち」

「…好きだなあ、って思ってた」

「私も好きよ」

「ほんとに？」

「ほんとよ」

甘い甘い告白タイム。

コトンのような柔らかいこの時間が私は大好き。

私たちが恋人関係じゃなくても、この幸せが味わえるのならそれでよかった。

——私と智は、友達。

正確には、友達以上恋人未満の関係。

私たちは、恋人同士だったが、二回別れている。

二人とも意地っ張りのぶきつちよで、喧嘩がなかなかたえなかった。

でも、離れると悲しくて、寂しくて。

結局また寄り添うことになる。

馬鹿な二人。

不器用な二人。

そんな私たちは、もう恋人同士になることをやめた。

会いたいな、遊びたいな、と思ったら会って幸せな時を過ごす。

『早く彼氏できないかな』

『俺も彼女ほしー』

そんな会話を繰り返して甘いキスをする。

智は私の一番近い場所にいる。そして多分、私は智の一番近い場所にいる。

大好き。

でも付き合つと駄目だから。

私たちは楽な道を選んだ。

一番楽で、苦しい道を。

「おめでとー！」

「いい夫婦になれよ」

舞う紙吹雪。

幸せそうな新婦新郎は、赤い絨毯の上を歩きはにかむようにして笑っている。

—いいなあ、幸せそう。

今日は友達、亜美の結婚式。

ブーケを持った亜美は皆の歓声を受けとても幸せそう。

綺麗。

…羨ましいなあ。

結婚願望はまだそれほどないけど、こんなの見せられちゃしたくな
つちゃうわよ。

「綺麗だなあ、亜美ちゃん」

隣に立っていた智が呟いた。

新郎の健吾くんは智の友達なのだ。

「ほんとね。綺麗…」

「美保だったらああはならないもんな」

「うわ、しっつれ」

ケラケラ笑った瞬間、わっと歓声が上がった。

花嫁である亜美が、ブーケを投げたのだ。

ブーケは手を伸ばしせめぎあう女達の頭上に弧を描いて、ポスツと私の胸元に落ちた。

皆の注目が私に集まる。

「次はあんなたちよー！」

亜美が笑顔で叫ぶ。

私は困ってしまった、とりあえず亜美と羨ましそうに見つめてくる女
たちに愛想笑いした。

「やだ、亜美ったら。勘違いしてる」

友達にはちゃんと智とは付き合っていないと言ってるけど、中には信
じてない子もいる。

はにかむ私に智は柔らかく微笑む。

「ほんとに結婚しちゃう？」

そんな智のジョークはいつものこと。

「冗談。私はもっといい人見付けるんだから」

「つめてゝなあ」

はは、と智が笑った。

「…でもさ。俺、お前しかいないかも」

そう呟いた智に、私はドキツとなる。

智はこちらを見ていないが、その瞳はいつもとは違う。

何だか私はいたたまれなくなって、下をうつむくほかなかった。

私と智は二回別れている。

一回目は私から。自由奔放でワガママな智に疲れた私は、別れを切り出した。

別に智が浮気をするとかじゃないのだけど、智はどこか捕え所がなく愛されているのかいつも不安だった。

それに耐えきれなくて、でも忘れられなくて、結局私からよりを戻した。

不信になっていた智を説得するのに二ヶ月はかかったつけ。

二回目は智からだった。留学を決意した智は専念するために、別れを切り出した。

嫌だと言う私と口論し喧嘩もいっぱいしたが、最後は私も納得して別れた。

そして帰国して今。

私たちは付き合うでもなく、かといってただの友達になるわけでもなく、会えば恋人のように振る舞うようになった。

それでいいと思った。

恋人じゃなくてもこうして幸せならそれでよかった。

——そう思っていた。

「え…今、何て…」

呆然とする私に、智が真剣な瞳を向ける。

智のこんな真剣な表情は、留学の話の日以来だ。

「結婚しよう、美保」

最初、智が何を言っているのかわからなかった。

けれど、頭の中で反芻してやっと言葉の意味を理解すると、私は驚愕するほかなかった。

——結婚…！？

「どう…して？私たち、付き合っていないじゃない」

そう言くと、智は強い瞳を私に向けた。

「でも、美保を他のやつに渡したくないんだ」

ドキッと鼓動が激しくなる。

——駄目、まだ…信じちゃ駄目…。

「どうして？このままでもいいじゃない」

気楽でしょ、と笑った私を見て、智が寂しそうに笑った。

「駄目なんだ、今のままじゃ…美保は俺のものじゃない」

そう言った智が子どもみたいで、何だかおかしくて。

私ははにかんだ。

——ああ、そうか。そうなのか。

「…智、ようやく出たのね。…独占欲」

——智に今まで足りなかったもの。

——私が今まで求めていたもの。

それは智の私への独占欲。

智が私じゃなきゃ駄目だと思う気持ち。

―それを私はずっと待っていた。

はにかむ私を智が抱き締めた。

「待たせてごめん」

「…気付いてたの？」

「うん…ごめん」

さらにぎゅっと抱き締めてくるから、私の心は切なくなった。

そう、私はずっと待っていたの。

自由奔放な智が、私を捕えてくれる時を。

私は付き合う人を一途に思う。けれど、それが智には息苦しくて。だから私たちは何度も失敗したし、別れを繰り返したの。そしてそんな智じゃ私は幸せになれない…そう思ったら寄りを戻すこともできなくて。

でも結局離れられなくて、あいまいなボーダーに立つことでごまかした。

いつか、もしかしたら智が私を体や遊び仲間としてじゃなく、一人の人間として求めてくれるんじゃないかと期待して。

――待っていたの。

「遅いのよ…馬鹿」

「ごめん」

謝る智が可愛くて、愛しい。

切ない感情が溢れてくる。

ずっとごまかしていた。

友達だと割りきれれば、智が自由奔放なのも許すことができた。でも一人じゃ寂しくて、会ったら繋がりたいと思ってしまってた。

だから一線を越えてしまっていた。

でももう、そんな矛盾を抱えなくてもいいのね。
だって智はもう、私のものなんだから。

「もう、離さないでね」

そう呟いたら、私を抱き締める腕にさらに力が入るのがわかった。
愛しい温もりに、めまいが起きそうになる。

「愛してる…美保」

「私も…愛してる」

甘い甘いコットンタイム。

これからはずっと続く。

——夢のような幸せに、私は涙をこぼしそうになった。

完

（後書き）

恋のかたちって、色々あると思います。好き同士でも「恋人」という枠にはまれないこともあるかも…と思い書いたのが今回の作品です。初作品ということでも拙くて読みづらい文章かもしれませんが、意見・感想等聞かせてくれたら嬉しいです！読んで下さってありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1532a/>

コットン・タイム

2010年11月14日14時16分発行